

## 追悼・山田晶先生

---

水 田 英 実

山田晶先生が不帰の客となられた。前夜に鎌倉市大船の病院にお見舞いした際には、眠っておられたから何もお話することができなかった。明日また来ますとご挨拶をして退出し、翌朝、再訪した直後にご容態が急変し、そのまま逝ってしまわれた。狼狽しながら先生の手を握りしめて、何度も何度も呼びかけたけれども、お返事が返ってくることはもうなかった。昨年（2008年）2月29日の朝である。

私が初めて山田晶先生に接する機会を得たのは、二回生の時に受講した西洋中世哲学史の時間である。山田先生は前年（1965年）の秋に京都大学文学部に戻って来ておられたけれども、時間割に一回生が受講できる科目はなかった。受講可能な最初の科目がこの中世哲学史の講義だった。研究講義や演習を受講するためには、専門課程に進むのを待たなければならなかった。研究室には上級生が既に何人もいたけれども、三回生から指導学生になったひとはまだいなかったと思う。

演習の一つは、トマスの『神学大全』を冒頭から、いつ読み終わるか分からないと仰りながら、毎週少しずつ、一項進むか進まないかというペースで読んでゆくものであった。10年後には第一部第十六問「神の真理について」まで来ていた。中世哲学会の事務局が京大にあった頃である。福井大学に赴任が決まった私は、この頃に京都を離れなければならなくなり、聴講を続けることが難しくなったけれども、先生はその後も、ご在職中ずっと、受講生がすっかり入れ替わってしまってもまったくお構いなしで、この演習を続けておられた。

ご定年（1985年）後、山田先生は名古屋の南山大学に移られた。ここでもトマスの演習を続けていると、楽しそうに話しておられたことを覚えている。中世哲学会委員長を務めておられたのはこの前後の8年間

である。毎年秋の中世哲学会の会場や宿舎で、他の学会員や卒業生とお話しをなさる合間を縫うようにして、ご研究について聞かせていただいた。時々、近況報告をするために伺うことはあったけれども、転任して広島に住むようになった私には、毎週の聴講はいよいよ困難であった。

ところで、『神学大全』を最初から読む演習は、私が受講し始めたときは、すでに二年目に入っていた。だから第一問はもう済んでいた。それで思い立って自分で最初から読み、勝手にレポートをまとめて山田先生のところに持って行ったのである。ところが山田研究室のドアに掛けられた行先表示は、いつも「多忙」になっていた。あとは「帰宅」しか見たことがない。「多忙」の表示に気圧されそうになりながらも、そのときは「どうしても」という気持ちだったから、表示を無視してノックした。随分思い切ったことをしたと今になって思う。

お忙しいのではないですか、と恐る恐るお尋ねすると、どうしてもというひと以外は退散してもらうためだから気にしなくてよいとお返事だった。それから一度も気にしたことがない。いつでもずかずかと、当時の「新館」四階西南角にあった研究室を訪ねていった。南山でも遠慮はしなかった。どうしてもお話をきかせていただきたかったし、また聞いていたかったからである。

学生の特権を行使したまでとはいえ、先生には随分迷惑な話である。そのときの印象として、うるさがられた覚えは全くない。しかし特にほめられたわけでもなかった。はっきり記憶していることが一つある。それは第一問第一項にいう「人間の救済」の意味に注意するようにということであった。朱の入ったレポートを返していただいたときのことである。

意味は分かるつもりでいた。「神のうちに存立する人間の全救済」は、「神の真理についての認識にこそかかっている」けれども、「もしこの真理が理性によって追求される場合には」、「人間理性によって追求される」にしても、啓示によらなければ困難を極めるといっているのであるから、見方を変えれば、特別な啓示によらずにその認識を得ることはできる。困難であっても不可能ではない。そのときのレポートにそう書いたと思う。「中世哲学」の可能性は、啓示を受けたことによって人間理性が確実に探求しうる領域が拡大したところに開かれていると強く感じていた

からである。

しかしこれは、「人間の救済」のために啓示が必要な理由の第一ではない。第一は「そもそも人間は神を目的としてこれに秩序づけられているが、この目的たるや、理性の把握を超えている。しかるに自分の意図と行為とを目的に対して秩序づけるべき人間たちには、まずもってその目的が知られていなければならない」から、「人間理性を超える或ることがらが神の啓示によって知らされることは、人間にとってその救済のために必要だった」ことにある（山田晶訳 トマス・アクィナス『神学大全』世界の名著 続5, 1975, p.80）。

この種の「知」の意味が分かるかと問うてくださったのであったと思う。信仰によって知られること、つまり、「人間にとってその救済のために必要だった」ことが、神の啓示によって知らされるというテーマは、そこに引用された「イザヤ書」(64:4) からも読み取れる。「神よ、あなたを愛する人々のためにあなたが備え給うたことがらを、人間の眼はあなたによらずには見るができない。」

神が先に人間を、理性の把握を超えた目的に向けて秩序づけた。この関係を啓示によって知るというテーマは、アウグスティヌス『告白』の冒頭にも出てくる。「あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」、「私の信仰があなたを呼びもとめます。信仰を与えてくださったのはあなたです」（第一巻第一章、山田晶訳 世界の名著 14, 1968, p.59）。先生は『告白』の演習も、毎年、学期中毎週一節のペースで進めておられた。

アウグスティヌスとトマス・アクィナスの思想上の連続性を強調なさっていたことは言うまでもない。というより二人の先達が織りなす思想の系譜の上に、ご自身の立脚点を置いておられた。山田晶先生は何よりも、信仰のひとであったと思う。その学風の根幹においても、日常の全般においても。だから「人間の救済」も、文献解釈の範囲を超えて、現実のことがらとして受けとめておられたと思う。

何かの折に話題が、フランシスコ・ザビエルの日本での宣教に及んだことがある。ザビエルの説教を聴いたひとたちの中に、キリスト教信仰を表明せずに死んだ父や母に救いはないと聞かされて、深く悲しみ、泣

くのをやめなかった人たちが多数いたという。「教会の外に救いなし」との考えがザビエルにあったのであろう。もしもう少し詳しくトマス进行研究していたら、必ずしもそのような排他的な態度はとらなかったのではないかということであった。ラーナーの「無名のキリスト者」にも賛成しておられた。

不帰の客となられたいま、もはや先生から直接お返事が返ってくることはない。しかし、もう一度この話題を取り上げていただきたかったと思う。文化的な装いの多様性を考慮すれば、どの宗教も他宗教から多くのことを学ぶことができるのは事実なのであるから、多元的な宗教理解を試みる余地があるのではないかというようなことを、まだお元気な頃に、南山大学の研究室でお話した記憶もある。あらためて山田先生のお考えをお尋ねしたいことは、ほかにも沢山ある。しかし幽明界を異にすることになってしまった今では、それももはや適わない。山田晶先生のご冥福をお祈りするばかりである。